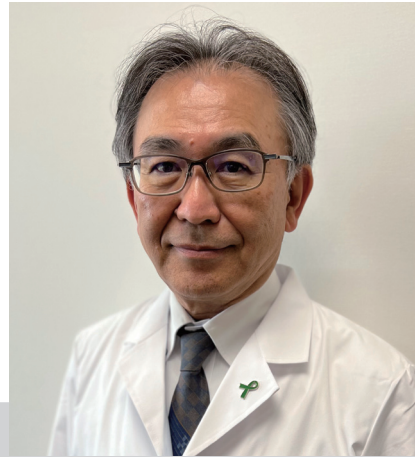


「地域と共に、八重山の医療を守る」を病院理念とし、八重山諸島の医療の最後の砦としての責務を負っています。



県立八重山病院 院長
和氣 亨 先生

P R O F I L E

- 昭和53年 那覇高校卒
- 昭和59年 筑波大学卒（国費留学生）
- 昭和59年 県立中部病院研修医
- 昭和63年 県立宮古病院
- 平成3年 県立八重山病院
- 平成5年 県立南部病院
- 平成18年 県立南部医療センター・こども医療センター
- 令和2年より同院院長
- 令和5年4月より県立八重山病院院長（現職）

質問1. この度は、県立八重山病院 院長ご就任おめでとうございます。ご就任に当たってのご感想と今後の抱負をお聞かせください。

前任地の県立南部医療センター・こども医療センターでも3年間は院長職でしたから、院長就任に当たって特別な感慨があるわけではありませんが、30年ぶりに赴任した八重山病院には、当時卒後8年目の若く未熟者だった私を透析医として2年間受入れてくれ、今度は院長として迎えていただき感謝しています。

当院では昨年12月、今年3月と副院長、院長が相次いで辞任され、その後任として南部医療センター・こども医療センターの院長・副院長が2人そろって名乗りを上げて異動してきました。私としては昭和から令和まで切れ目なく続けた公務員医師生活の最後の2年間は八重山に恩返しをしようと異動を申し出たわけですが、まずは前院長から引き継いでいくつもの課題の解決に向けて、精一杯頑張りたいと思います。

質問2. 11の有人離島があり、地元住民のほか多数の観光客が常時滞在する八重山圏域の中核病院として重要な役割を担っておりますが、医師不足、救急医療を含めた離島医療の現状と課題についてお聞かせください。

令和2年来の新型コロナウイルス感染症で激減した観光客も、今やコロナ前を上回るほどに回復し、石垣の街は活気にあふれています。人々

の活動や移動が活発になるにつれ、病院では入院、外来とも患者数が増えてきました。これまで外出や人との接触を控えるあまり、健診や病院受診の機会を失っていた方々がいなかったかが危惧され、今後の受診者の疾病構成の変化に注目したいところです。

【医師不足の現状と課題】

当院に限らず、医師確保は離島へき地の病院に共通の重要な課題です。当院は24の診療科を標榜し、62人の医師と5人の専攻医がいます（令和5年10月）が、医師が充足しているわけではなく、医師1人だけの診療科が5科、常勤医不在の科が3科あります。若い医師が多く医局は活気がありますが、派遣元や自身のライフプランによる異動や退職で医師に欠員が生じるたびにその代わりを見つけてくるのは大変

な苦勞で、病院事業局と共働して医師を求めて全国を行脚するのも院長の重要な役目となっています。一方で、石垣島が観光地として知名度が高いおかげで、病院HPを見た入職希望者の応募は少なからずあり、初期研修医の地域医療研修の場としても石垣島は人気で、今年度も全国各地から50人の初期研修医が短期研修に来てくれます。この中から離島医療に興味を持つものが現れ、未来のドクターコトーが育っていくことを願っています。また、当院の総合診療科は「島医者になる。」のキャッチコピーとともに日本最南端の総診として知名度が上がっており、昨年度からは専攻医の育成プログラムをスタートして診療所に勤務する島医者を自前で育てており、次年度には第1期生2名が診療所医師として勤務することになっています。

【救急医療の現状と課題】

救急医が提供したい救急医療と、住民が求める夜間休日診療所的な救急ニーズとのミスマッチは県内どこでも起きていることだと思います。石垣市にも以前は八重山地区医師会の夜間診療所があったそうですが、現在は時間外の急患に対応しているのは当院と石垣島徳洲会病院の2病院であり、当院では平日50人前後、土日祝日80人前後の急患を、3人の救急医と内科・外科・小児科の3人の当直医が互いを補完しながら診ています。

石垣島周辺の小規模離島からの急患搬送は海上保安庁のヘリで行われ、病院に隣接する暫定ヘリポートを利用します。一方、病院から沖縄本島へ重症者を搬送する際には、航続距離の長い自衛隊の大型ヘリが那覇から迎えにきますが、暫定ヘリポートでは小さいため新石垣空港まで陸路を搬送しての引継ぎとなります。病院の隣接地に大型ヘリが離発着できる恒久ヘリポートの建設を求めており、行政に設置場所の調整を委ねているところです。

【離島病院ゆえの課題】

離島の県立病院には標準的で安全な医療の提供が求められており、その医療レベルを維持するためには、医師ばかりでなく全ての医療者を安定的に確保する必要があります。職員の大部

分は島外の出身者で、異動によりつかの間石垣島に居住する者たちですから、住宅確保が大きな問題で、観光ブームでホテル建設や移住者のためのマンション建設が活発な反面、異動職員の住居探しは大変です。とくに新卒者には住居費の負担が大きく、病院としては自前の職員宿舎を確保して、職員が安価に快適に暮らせて、長期に勤務が続けられる住環境を提供したいと願っています。海山の自然に恵まれた環境ですから、小さな子ども連れでの赴任も多く、病院付属の託児所も欲しいところで、医師確保、職員の住宅確保、保育所建設など、前院長から多くの課題を引き継ぎました。

将来的に若い人が少なくなっていくなか、地元出身者から次世代の医療者を育てていくことは未来の八重山病院職員を確保するうえで重要で、小中学生を対象におしごと見学会、高校生には職場体験を通じてこの新しく快適な病院に触れてもらい、医療者を志して将来この島に戻って定着する者が増えて欲しいと期待しています。

質問3. 和氣院長は平成3年に八重山病院に透析室を開設するため2年間勤務し、今回30年ぶりの勤務となりますが、30年前と比べ現在の八重山病院における透析医療の現状や今後の展望はいかがでしょうか。

当院は平成30年10月に現在の地に新築移転した県立6病院で最も新しい建物で、旧病院時代の面影は残っていませんが、職員には古くからの仲間が今も勤務していますし、また退職後も地元で暮らすOB会の方々が、定期的に病院周囲の草木の手入れに来てくださいますので、お会いしては当時を懐かしんでいます。

透析室開設の前年、急性腎不全で無尿となり利尿剤も効果がなく、溢水からうっ血性心不全、高K血症になった高校生を、ありあわせの機材を使って急ごしらえした透析器で治療したことがありました。その後看護師になった彼女は、今年6月のコロナ流行で八重山病院が危機的となったときに、勤務先から休暇を貰って石垣に戻り、病院を手伝ってくれました。また、現在の透析

室師長は30年前と一緒に透析室を立ち上げた仲間、開設間もない平成4年に透析患者が妊娠・出産したときに患者管理の苦楽を共にした友人です。駆け出しの透析医だった私を支えてくれた人たちや、当時は患者だった人と、また一緒に仕事ができるのは嬉しい体験です。

透析コンソール8台からスタートした透析室ですが、30年経った今は17台に増え、1日25人前後の患者さんを透析しています。赴任前に石垣には透析患者が多いと聞いていましたが、人口当たり患者数は県全体の平均と変わらず、透析患者多発地区というわけではありませんでした。問題は透析医療に従事する職員が不足していることにあり、透析看護は技術の習熟に時間を要するものですが、3年毎に異動がある県立病院ではその習熟者を絶えず確保することの難しさがあります。

質問4. 沖縄県医師会に対してのご意見・ご要望がございましたらお聞かせください。

コロナの流行でwebでの講演会や会議が急速に普及したことは、離島に住む者にとっては出張の負担が減り大きな恩恵となっていますが、もうそろそろ対面での会議や講演会もあっていいですね。医師会の先生方との懇親会での会話の中から、新たな気づきや連携が生まれることを多く経験しています。県医師会と地区医師会との交流、地区医師会と病院との交流などが、これから色々な場で行われ、医師会の先生方とリアルな場でお会いして、病院の困りごとをご相談させていただければと思います。

質問5. 最後に日ごろの健康法、ご趣味、座右の銘等がございましたらお聞かせください。

人間ドックでHbA1c値が年々上昇してとうとう6.0を超えた頃からは、休日にウォーキングをするようにしています。はじめのうちは、携帯のゲームアプリでポケモンを拾いながら歩くゲームにはまっていましたが、今はピクミンと一緒に花を植えながら歩くゲームの方で、健康のためという大義名分はなく、単に楽しいゲームとして歩いています。始めた時には無料ゲームの範囲内で利用すると自分に誓っていましたが、いまではこっそり課金までしてレアアイテムを集めていて、HbA1cはちょっとずつ下がってきたので、治療費と思えば安いものと自己弁護しています。

座右の銘というほどの改まったものはありませんが、院内ネットワークの電子掲示板の自己紹介文には南部医療センターでの院長当時と同じく「自画自賛」をあげました。病院運営・経営はトラブルがなく安定しているのがデフォルトで、赤字が減っても誰も褒めてはくれないし、水面下での管理者の苦労は誰かに自慢するものでもないの、しょうがないから「自画自賛」です。HbA1cでの自己弁護といい、はやりの言い方をすれば自己肯定感ですかね。反省はしませんが、過ぎたことをくよくよ考えることはせず、常に前向きでいたいと思っています。それとときどきカミさんに呆れられますけどね(笑)。

インタビュアー：広報委員 久貝 忠男

